



Title	現代漢語感覺表達研究
Author(s)	李, 維宸
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/82269
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (李 維 宸)

論文題名

現代漢語感覚表現研究

論文内容の要旨

感覚表現は基礎的で、日常生活において常用される表現であり、人間の世界に対する基本的な認識を反映している。言語教育においては、感覚に関する表現自体が不可避であり、不可欠な授業内容である。そのため他の内容を学習する話題や題材のなかでも多く用いられる。しかし、感覚表現に対する研究、特に構文研究は重要視されておらず、いくつかの具体的な感覚語の使用も見た目ほど簡単ではないことが多い。本研究では、感覚語の観点から、現代中国語における54語の感覚語の意味とコロケーションを考察した。現代中国語感覚表現体系に対して、より深く具体的な認識を獲得し、中国語教育に貢献することを期待している。

本稿は全7章から構成される。各章の主な内容は以下の通りである。

第1章は序論部分であり、主に本文の研究背景、問題の提出、研究目的と意義、研究対象及び研究方法、及び論文の構成などについて述べる。

第2章では、関連する研究の成果について整理を行い、本研究の立場を示す。また、感覚表現に関する文法研究について、感覚表現に触れた先行研究及び感覚表現に焦点をあてた研究を紹介し、本研究に対する指導的意義を述べる。これにより、感覚の内因性/外因性、接触性/非接触性などの特徴の観点だけでは、感覚表現の全体像を正確に反映することはできないと考えられる。感覚表現に関する意味研究では、既存研究の対象重複や方法論がやや不足していることなどの問題点があると考えられる。また、「中心義」に関する問題は意味研究において重要な一環であると指摘した。

この点においても、先行研究での意味と文法とのつながりに着目している。また、フレーム意味論の観点から、感覚主体、身体部位、感覚起因が感覚意味フレームの中で最も重要なフレーム要素であることを認識した。これらの要素と感覚語との共起関係は感覚表現の基本形態を構成しており、感覚表現を検討することは感覚語とその組み合わせを考察することから着手できることを示唆している。

第3章では、感覚表現に関する感覚語体系についてマクロ的に考察する。また、主体の感覚を表現するために用いるか、事物の属性を表現するかという観点から、感覚語を狭義の感覚語、属性感覚語、複雑感覚語の3つに分類する。狭義の感覚語とは、個人の感覚を直接表現する意味を持ち、形式的に感覚主体やその身体部位と組み合わせた感覚語、例えば“饿”“饱”などである。属性感覚語とは、事物の属性の特徴を述べる意味を持ち、形式的に感覚起因と組み合わせた感覚語、例えば“好看”“咸”などである。複雑感覚語とは、主体の感覚体験を直接表現することも、感覚を引き起こす事物を形容する属性にも用いることができるものである。形式的には感覚主体やその身体部位と組み合わせることが可能であり、また、感覚起因を組み合わせることもできる。例えば“疼”“暖和”などである。感覚語が表す感覚と属性との関係についても分析した。

第4章では、54語狭義感覚語、属性感覚語、複雑感覚語についてケーススタディの考察を行った。実際のデータに基づいて、それらの具体的な使用状況、共起制約条件、根拠を分析した。特に、各種類の感覚語の内部間、および具体的な感覚語が感覚主体、身体部位、感覚起因と組み合わせる場合に現れる不平衡性に注目した。具体的には、これらの不平衡性は主に以下のものに現れている。1. いくつかの語は感覚主体、身体部位、感覚起因のいずれかまたは両方を組み合わせる場合は無条件であり、残りの対象を組み合わせるには条件があり、あるいは許容されない。2. いくつかの感覚語は語彙的に他の感覚語と同義/類義語関係を構成することができ、構文的に非対称性を示す。3. 同一感覚語が異なる対象を組み合わせる際に表現される意味が変わる可能性があり、それぞれ外部感覚、内部感覚、さらには心理感覚として表現されるものもある。4. 感覚語によって内部の不平衡度に差がある可能性があり、不平衡度が高く、典型的な用法や非典型的な用法が判断しやすい語もあれば、複数の用法が典型的な用法と見なすことができるものもある。5. 三種類の感覚語の間には、特に“累”などの複雑な感覚語と対応する

“累人”などの属性感覚語との間に、代替可能な関係が存在する場合がある。6. いくつかの感覚表現は一定の類推可能性と生産性を示した。これらの分析をもとに、感覚語の使用をまとめた。

第5章では、感覚表現の周辺的な問題点について議論する。主に感覚表現におけるムード問題と心理分野への語義拡張問題である。ムードについては、“事実を報告するムード”と“感覚を直接に表出するムード”を区別し、2種類のムードと程度副詞、感覚語の重複形式および裸の形式との関係を検討した。心理感覚では、異なる感覚語と心理部位の組み合わせに現れる構文と造語レベルの結合能力の違い、そして関連する意味や用法の分化や生産性に注目している。

第6章では、代表的な教材と辞書中の感覚表現の分析を試み、二教材における感覚表現に関する共通点とそれぞれの特徴を整理し、前述した研究と相互に立証する。また、辞書中の感覚表現の状況を分析したところ、辞書には意味や用法表記が不正確であり、基準が不明瞭であるなどの問題があることが分かった。その上で、教科書・辞書編纂と教授法について提言した。1. 言語学習における感覚表現の重要性を重視すべきである。2. 学習者の母語と中国語の感覚表現の相違点と類似点を重視すべきである。3. 文脈と環境の設定を重視すべきである。4. 感覚表現の体系性を重視し、学生の学習意欲を引き出すべきである。5. 典型的な表現を重視し、余力がある場合は非典型的な表現も考慮すべきである。

第7章はまとめの部分であり、本研究の主な内容を整理し、結論をまとめ、今後の研究課題について述べた。本研究では、感覚語の意味と共起の観点から、感覚と属性の関係を中心に、狭義の感覚語、属性感覚語、複雑感覚語の三足鼎立の感覚表現体系を構築した。従来の感覚のタイプによる構文表現分類についての見解は不完全であり、例外に遭遇しやすく、体系内で解釈しにくいといった欠点があった。本研究は現代中国語における感覚表現の本質を明らかにすることで、これらの欠点を克服した。感覚表現の分析・整理によって、中国語の言語現象と規則をよりよく認識し、関連する中国語教育に一定の貢献をすることができると思慮する。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (李 維 宸)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	古川裕
	副 査	教授	清水政明
	副 査	准教授	王周明
	副 査	准教授	張恒悦
	副 査	講師	鈴木慎吾

論文審査の結果の要旨

『現代漢語感覚表現研究』（現代中国語の感覚表現）と題する本論文は、現代中国語でさまざまな感覚を表現する言語事実を広く観察し、構文・意味・用法の角度から感覚表現を構成する感覚語を体系的に分類整理し、その考察結果に基づいて日本語母語話者に対する中国語教育に提言を行った優れた論文である。

そもそも感覚表現とは個々人の内的な経験を言語化するものであり、学習によって後天的に習得した外国語を用いてそれを的確に表出することには大きな困難が伴う。このような非母語話者の特徴を出発点として、感情や感覚表現に関する中国語研究は中国本土よりも日本での問題意識が相対的に高く、大河内康憲1997、古川裕2003、木村英樹2017などの研究成果が蓄積されている。本論文はこれら先行研究の流れを正しく継承し、これらの研究が十分に解き明かせなかった問題点を指摘し、合理的な解釈を与え、研究を更に前に進めている点は高く評価できる。また、論文全体を通して議論は論理的に展開され、慎重で明確な記述がなされている。

本論文は全七章から構成されている。

第一章「引言」は序論で、研究背景、問題点の所在、研究の目的と意義、研究の対象と方法が述べられている。

第二章「研究総述」では、感覚表現に関連する先行研究を整理し、その成果と不足を指摘している。

第三章「感覚詞体系概観」では、感覚表現の成立を支える感覚語の体系を俯瞰的に考察し、共起する成分との関係に基づき狭義感覚語・属性感覚語・複雑感覚語の三類に下位分類し、それぞれに属する語と各類の個性と共通性を詳述している。ここでは、曖昧な意味的基準に拠るのではなく、形式的な文法操作に基づいて感覚語の下位分類を行っている点を評価することができる。

第四章「個案研究」では、総計54の感覚語についてケーススタディがなされている。ここでは、各類に属する感覚語が見せる不均衡性が実例によって明らかにされており興味深い。たとえば、たとえ同類の感覚語であっても共起できる成分の選択に個性があること、共起する成分の違いによって外部感覚・内部感覚・心理感覚に跨る機能を有する感覚語があることなどが明らかにされている。

第五章「感覚表現中の語気と心理感覚」では、感覚表現とムードの関係性および心理感覚への拡張について考察している。感覚表現を事実報告ムードと感覚表出ムードの二つに区別し、それぞれに出現しうる副詞の特徴や感覚語の形態の違いが示されており、説得力がある。

第六章「代表性教材と辞典中の感覚表現」では、中国と日本の中国語教材を俎上に上げて、いずれも感覚表現の扱い方に偏りが見られることを指摘し、日本語と中国語の相違点と類似点を重視した教材および教授法を提言している。また、規範的な辞書であっても感覚語に関する意味用法の記述が十分ではないことも指摘している。

第七章「結語」は本論文の研究結果をまとめ、今後取り組むべき課題を提示している。

以上のように、本論文は対日本人中国語教育への応用を視野に入れ、感覚表現を支える感覚語を実証的に分析した好論文である。用語の名称修正、分析不足の問題点を再考すべき点など今後の研究に期待する部分も多いが、研究の空白地帯を一定程度埋めることに貢献している点は大いに評価できる。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）学位を得るにふさわしい論文であると判断した。